

神の国のメタファー：マルコによる福音書における 譬えの文学的・神学的機能

原 口 尚 彰*

抄 録

イエスはガリラヤの民衆に語り掛ける際に、神の国の譬え話を用いることが多かった（マコ 4:1-9, 26-29 他）。譬え話は簡潔なストーリーを伴った譬えであり、イエスは聴衆の理解を助けるために用いた（マコ 4:31-32）。譬えは聞いた者の脳裏に特別な意味を喚起するメタファーとして機能している。メタファーは新たな意味を創り出し、聞く者を新たな現実認識に導く効果を持っている。福音書中の譬え話の多くは史的イエス自身に遡るものであるが、一部には初代教会由来の喩え話も存在している（例えば、マタ 25:1-13, 31-46; マコ 12:1-12; 13:34-36; ルカ 14:5-24 他）。これらの譬え話は、キリストの再臨の時を迎える信徒の心構えについて語る勧告的な機能を持っている。

Keywords: 譬え話、メタファー、理解、イエス、初代教会

1. はじめに

共観福音書に収録されているイエスの譬え話は、多くの新約学者の関心を集め、研究が積み重ねられている¹。しかし、彼らの多くが関心に向けてきたのは個々の譬え話の分類と分析であり、福音書物語中の機能ではない。また、文学的機能の点からすると物語性を持たない譬えと物語性を備えた譬え話の間に根本的な相違はないが、両者を切り離して、譬え話だけを独立のジャンルとし

て考察する傾向が強い²。

本論考はマルコ福音書の譬えの積義的・神学的考察である。考察を進める具体的手順としては、最初に譬えという文学形式をどのように理解すべきかについての理論的検討を行う。次に、マルコ福音書中の個々の譬えの積義的検討を行う。その際には、譬え話として語られている言葉だけでなく、警句や諺の形で語られている譬えも考察の対象とする。また、譬えが語られている物語的文脈を考慮して、譬えが持つ修辭的機能について考察する。最後にまとめと展望として、マルコ福音書全体の中で譬えを通して語ることが持つ神学的意義について考察する。

* Haraguchi, Takaaki
日本ルーテル神学校講師

2. 譬えと譬え話

譬えはあることを異なった事柄になぞらえる文学形式であり、未知のことを既知のものに対比し、不可視的なことを可視的なことに置き換えて修辭的効果を挙げることを目的とする³。譬えは聞く者の理解を助け、メッセージを強く印象付ける効果を狙っている⁴。文学的機能からすると譬えは連想によって新たな意味を創り出して新しい現実認識をもたらす表現手段の一つである⁵。譬えは散文にも詩文にも使用できるが、象徴性の強い言語表現として詩文との親和性が強く、詩作に用いられる非日常的語法の一つとされる（アリストテレス『詩学』1457a-1459; 『弁論術』1406bを参照）⁶。

言葉による説得の技術である修辭学は、譬えを修辭技術の一つとしている⁷。修辭学によれば、譬えとはある事物を他の事物に置き換えて表現することである（アリストテレス『弁論術』1405a; クウインティリアヌス『弁論家の教育』8.6.1）⁸。修辭学は譬えを論証手段である例証（παράδειγμα）の一つに位置付けているが（アリストテレス『弁論術』1393a-b）、譬えによって聴衆を新たな現実認識に導くことが出来ることがその理由であろう⁹。但し、譬えは間接的な言い方であり、それが何を象徴しているかということについては複数の解釈が成り立つ余地がある¹⁰。譬え話の学問的研究の先駆者である Jülicher や Dodd や Jeremias がかつて主張したのとは異なり¹¹、譬えの比較点は単一ではなく、その意味は一つであるのではない¹²。

譬え（Gleichnis）は比喩やメタファーとして短い成句（Bildwort）の形で用いることが出来る。例えば、山上の説教においてイエスは弟子たちが「地の塩」（マタ 5:13）、「世の光」（5:14, 16）であると宣言しているが、これらは短い成句の中に用いられたメタファーの例であり、イエスを信じる者が社会の中で果たす機能を塩や光といった身近な物質や物理現象に譬えている。

修辭学は譬えの下位概念である比喩（παραβολή）とメタファー（μεταφορά）を区別してきた。語源

論からすると、並べて比べることを意味する比喩（παραβολή）が比較の契機に注目しているのに対して¹³、移動させることを意味するメタファー（μεταφορά）は置き換えの契機を強調している¹⁴。文体論からすると、比喩は「・・・のような」といった比較の言葉を伴うが、メタファーはそのような句を伴っていない。しかし、ある事物を他の事物に置き換えて表現するという性格は、比較の言葉が明示されるどうかを問わず存在しており、修辭的機能の点からすると比喩とメタファーの間の違いは大きくない（アリストテレス『弁論術』1406b）¹⁵。

譬え話（Parabelerzählung, Gleichnisrede）はストーリー性を備えた譬えであり、共観福音書が伝えるイエスの言葉伝承の中に沢山出て来る（マタ 13:24-30; 13:47-50; 25:1-13; 25:14-30; 25:31-46; マコ 4:1-9; 4:21-20; 4:21-23; 4:26-29; 4:30-32; ルカ 10:30-37; 15:3-7; 15:8-10; 15:11-32 他多数）¹⁶。譬え話も短い譬えの句（Bildwort）と同様にメタファーであることに変わりはない¹⁷。譬え話は共観福音書においては、パラボレー（παραβολή）と呼ばれる（マコ 4:2, 10, 11, 13, 30, 33 並行）¹⁸。このギリシア語名詞は七十人訳聖書では、ヘブライ語マーシャル（מַשָּׁל）の訳語として使用される（王下 5:12; 箴 1:6; コヘ 12:9）¹⁹。マーシャル（מַשָּׁל）の基本的な意味は「格言」であるが（サム上 24:14; 王上 5:12; 箴 1:1, 6; 10:1; 26:7; イザ 14:4; エゼ 18:2 他）、「託宣」や（民 23:7, 8; 24:3, 15, 20）、「謎」を意味することもある（詩 49:3-4; 78:1-3; エゼ 12:22; 17:2; 18:2）²⁰。

共観福音書において、譬え話の冒頭に οὕτως ἐστὶν ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ（「神の国は・・・のようなものである」）という句や（マコ 4:26）、或いは、ὁμοία ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν（「天国は・・・に似ている」）という句が置かれていることがある（マタ 13:31, 33, 44, 47, 52; 20:1 他）²¹。マルコ福音書においてイエスは、πὼς ὁμοιωσωμεν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ（「神の国を何に譬えようか」）という導入句で譬え話を導入することもある（マコ 4:30 を参照）。これらの導入句はイエス

の言葉の聞き手に対して、これから始まる話が譬えであることに注意を喚起している。形容詞 ὁμοιος や動詞 ὁμοιόω は同質性や類似性を表す言葉であるので²²、福音書記者たちが譬えの本質を類似と比較に見ていると共に、イエスの譬え話の中心主題が神の国の到来であることを示している。

マルコ福音書は、イエスが聴衆の聴く能力に応じて身近な譬えを用いて語ったとする（マコ 4:33-34 並行）²³。マルコ福音書は神の国の不思議を表現するイエスの譬え話を沢山収録している（マコ 4:1-9; 4:21-20; 4:21-23; 4:26-29; 4:30-32）。共観福音書が伝えるイエスの譬え話の多くは、伝承や編集の過程で文言や内容がかなり変化しているにしても、中核部分は史的イエスに起源するとされている²⁴。それぞれの譬え話は聴衆である民衆と弟子たちが、神の国の福音の本質を発見し、認識する手段として用いられた文学表現であり、それぞれの内容とその機能を置かれた物語の文脈の中で検証する必要がある²⁵。

3. マルコ福音書における譬え

3.1 叙述文中の喩え

譬えは物語の叙述文の中にも登場人物の発言の中にも使用されている。マルコ福音書では、冒頭の「(神の子) イエス・キリストの福音」という表題の後に置かれた、出 23:20 とイザヤ書 40:3 からの引用句の中に、「荒野で呼ばれる者の声」「主の道を備える」という表現が出て来る（マコ 1:2-3）。この旧約引用は、マコ 1:4 に登場する洗礼者ヨハネの役割について読者に予め説明する役割を持っている。第二イザヤ本来の文脈では、「荒野で呼ばれる者の声」とはバビロン捕囚からの解放を告げる預言者の声を指し、それは、「主のために荒野に道を備えよ」という言葉で始まっている（イザ 40:3）。マルコはこの句を洗礼者ヨハネの活動を預言した言葉と考えて引用している。罪の赦しを受けるために悔い改めを勧める洗礼者ヨハネの宣教活動はヨルダン川のほとりの荒野で行われており、ヨハネを旧約預言が言及している「荒野

に呼ばれる声」と同定することは難しくなかった。他方、「主の道を備える」という句はメタファーとして用いられており、文字通り道路を設置することではなく、主イエスの到来に先立ってイスラエルの民のもとにやって来て、人々の心を整えて主の到来の準備をすることを指している²⁶。マルコは良く知られた旧約預言に出て来る言い回しを借用することで、洗礼者の活動の意味を印象的に表現している。

3.2 イエスが用いる譬え

福音書物語の登場人物であるイエスの発言の中には、沢山の譬えが使用されている。イエスの譬えは語られた場所と聴衆によってかなり性格が異なっている。ここでは、ガリラヤで語られた譬えと（マコ 1:17; 2:17; 2:19; 2:21; 2:22; 7:27; 8:15; 8:34）、エルサレムへ向かう途中で語られた譬えと（9:50; 10:16; 10:25; 10:38; 10:43; 10:44）、エルサレムで語られた譬え（11:17; 12:25）に分けて考察してみる。

ガリラヤで語られた譬え

イエスはヨルダン川で洗礼者から受洗した直後に（マコ 1:9-11）、荒野で四十日間サタンの誘惑を受けた後に（1:12-13）、ガリラヤに戻り、神の国の福音を説く活動を始めている（1:4-15）。彼はガリラヤ湖岸で出会ったシモンとアンデレの兄弟に対して、「私に従って来なさい。人間を獲る漁師にしてあげよう」と語っている（1:17）。「人間を獲る漁師」という言葉は比喩的な表現であり、イエスの弟子になって伝道者となることを指している。伝道者が福音を伝える宣教活動を通して回心者を得ることを、網を打って魚を捕まえる漁業に譬えているのである。この譬えはシモンとアンデレが漁師であり、彼らが漁をしている時に出会ったので、イエスが漁業を裁きに譬える旧約聖書の文学的伝統を踏まえながらも（エレ 16:16; エゼ 29:4-5; アモ 4:2; ハバ 1:14-15）、その意味を逆転させて人々を回心へと到らせる宣教者という意味付けを与えたのであると考えられる²⁷。二人の

兄弟は即座に網を捨ててイエスの後に従っているので(1:18)、譬えの意味することを即座に理解したと思われる。

マコ 2:17 に引かれている「医者が必要としているのは健康な者ではなく病人である。私は義人でなく、罪人を招くためにやって来た」というイエスの言葉は、徴税人や罪人たちを受け入れて一緒に食事さえしているイエスの態度を非難するファリサイ派の律法学者に対する弁明としてなされている。前半の「医者が必要としているのは健康な者ではなく病人である」という文章は恐らく当時のユダヤ人の間に流布していた格言であろう(『メキルタ・出エジプト記』15:26を参照)。後半の「私は義人でなく、罪人を招くためにやって来た」という文章は、徴税人や罪人たちを受け入れるイエスの振る舞いの意味を提示している²⁸。この後半の文章があるために、前半の文章がメタファーとなり、イエスは自らを医者に、義人を任じるファリサイ派を健康な人に、徴税人や罪人たちを病人に譬えていることになる(シラ 38:9-10, 15を参照)²⁹。イエスは論敵たちの非難に対して格言をメタファー化して効果的に反論しており、論敵たちは非難を続けることを断念している³⁰。

2:19の「婚礼の客は花婿と一緒にいる間は断食することが出来ない」という言葉は、イエスの弟子たちの禁欲的ではない生活様式に対して、洗礼者の弟子たちやファリサイ派の弟子たちから寄せられた疑問に答えて語られている(マコ 2:18を参照)。当時の敬虔なユダヤ教徒たちが宗教的な行として断食を行っていたのに対して(ユデ 8:6; シラ 34:31; マタ 6:16-18; マコ 2:18; ルカ 2:37; 18:12を参照)、イエスとその弟子たちは行っていなかった。その理由としてイエスは自らを花婿に、弟子たち婚礼の客に譬え、良い知らせである福音を語る先生と共にいる間は、悲しみの表現である断食(サム上 31:13; サム下 1:12; 3:35; 詩 35:13; 69:11を参照)を行うことが出来ないことを表明して反論している(『バビロニア・タルムード』「シャバト」114aを参照)³¹。この言葉は格言風の表現であるが、シオンの回復を婚礼の喜びに譬え

る旧約預言の伝統に基づいて(イザ 61:10; 62:4-5)、イエスがある場で臨機応変に創り出した警句であろう³²。これに対して、「彼らから花婿が奪い去られる時がやって来るときには、彼らは断食することになるだろう」という言葉は、イエスの死と復活後の教会が付け加えた伝承であろう³³。初代教会は折りにふれて断食を実践しており(使 13:2-3; 14:23; 27:9; デイダケー 8:1を参照)、イエスの譬えを自分たちの状況と慣行に適合するように再解釈したのである³⁴。

マコ 2:21-22も福音に生きる者の生活の在り方が、既存のユダヤ教の敬虔の在り方とは根本的に異なることを示すために語られたイエスの譬えである³⁵。古い布切れに縫い付けることの出来ない「新しい布切れ」や(2:21)、古い革袋に入れることの出来ない「新しい葡萄酒」(2:22)とは、イエスが説いた新しい教えである福音に基づく生き方のことである³⁶。新しい布切れを古い布に縫い付けてはいけなかったことや、新しい葡萄酒を古い革袋に入れてはならないことは、当時のガリラヤの民衆の生活体験から生まれた諺であったと考えられる。イエスはこの生活知を示す諺を福音に生きることを示す譬えとして用いて修辭的效果を上げている。この譬えによって弟子たちやファリサイ派や洗礼者の弟子たちは、福音に基づく生活の本質的新しさを認識することになる。

マコ 7:27においてイエスは娘の癒しを願うツロフェニキア的女性に対して、「子供たちのパンを取って犬に投げてやるのは良くない」と述べている。この場合は、「パン」とはイエスが与える癒しであり、「子供たち」とはイスラエル人、「犬」とは異邦人のことを指している³⁷。女性はこの譬えを理解して即座に、「食卓の下にいる犬も子供たちのパンくずを食べます」と答えている(7:28)。イエスは女性の願いに応じて、その娘を癒している。

四千人の給食の出来事の後にはイエスは弟子たちに対して、「ファリサイ派のパン種とヘロデのパン種によくよく気を付けなさい」と述べている(8:15)。「パン種」はこね粉を膨らませる酵母で

あるが（マタ 13:33; 16:12; ルカ 13:21）、ここではこね粉の素材を内側から損なうものとして否定的に見られている（I コリ 5:6; ガラ 5:9 を参照）³⁸。「ファリサイ派のパン種とヘロデのパン種」とは彼らの教えや偽善的な生活態度のことを指しているようであるが（マタ 6:2, 5, 16; 23:13, 15, 23, 25, 29; ルカ 12:1 を参照）、一義的には明らかではない。謎を掛けられた弟子たちは譬えが理解できず、自分たちがパンを十分に持つてくるのを忘れたからなのかと論じ合った（マコ 8:16）。

弟子たちに対してなされた第1回の受難予告の後に（8:31-33）、イエスは群衆を弟子たちと共に呼び寄せて、「自分の十字架を負って私に従って来なさい」と述べている（8:34）。この言葉は、当時は囚人が自分の十字架を背負わされて刑場に連行される慣行があり、後にイエス自身が自分の十字架を背負わされるが、弱ったイエスに代わってキレネ人シモンが十字架を背負ってゴルゴタへ向かうこととなる（マコ 14:21-22）。「自分の十字架を背負ってイエスに従う」とは、イエスを信じる者が直面することになる様々な困難や苦難を象徴している³⁹。この句は初代教会が形成した伝承であり、イエスの死と復活後の教会の信徒たちが、信仰故に負うことになる様々な苦難をイエスに従う者の宿命として引き受けることを意味している⁴⁰。この譬えの意味はイエスの受難を記憶する信徒たちには、自明であり、説明を要しないものであった。

エルサレムへの旅の途上で語られた譬え

マコ 9:30-10:52 はイエスが弟子たちと共に行った旅の記事である。イエスは旅の途上、弟子たちに様々な教えを与えた。イエスは教えの中でしばしば譬えを用いている。例えば、イエスは弟子たちに「自分自身の内に塩を持ちなさい」と勧めている（9:50）。この句の後に「そして、互いに平和に過ごしなさい」という言葉が続いているので、平和な対人行動を生み出すような弟子たちの心の在り方を塩付けることに譬えていることが分かる。塩（ἅλας）は生活に不可欠な物資であり、

食物に味を付ける働きと食物を保存する働きとがある。旧約聖書には両方の働きに言及がある⁴¹。ヨブ 6:6 は卵のように味がないものに味を付ける調味料としての塩の働きを語る。祭儀で捧げる犠牲に塩を掛ける習慣もあったが（レビ 2:13; エゼ 43:24）、これは塩の殺菌作用を前提にした清めの意味であろう。「塩の契約」（民 18:19; 代下 13:5）は、塩の保存作用によって永続する契約という意味である。「自分自身の内に塩を持つ」とは、心を腐敗から守り、人との平和を創り出す平静な心を持つことを言っているのであろう⁴²。

金持ちの青年が、すべての財産を売り払って貧しい人々に施しを行うようにとの勧めに従うことが出来なかったエピソードの後に（マコ 10:17-22）、イエスは弟子たちに財産と神の国に入ることとの関係についての教えを与えている（10:23-27）。その中でイエスは、「ラクダが針の穴を通る方が、金持ちが神の国に入るよりも容易い」と述べる。ここでは、「ラクダが針の穴を通る」ことは不可能なことの象徴として用いられている。この誇張した表現は、当時のユダヤ人社会で不可能なことを表す決まり文句となっていたと考えられるが、その意味は弟子たちにもマルコ福音書の読者にも明らかであった。

栄光を受ける時には、その右と左に座らせて欲しいというゼベダイの子らの願いに対してイエスは、「私が飲むことになる杯から飲み、私が受けることになっている洗礼を受けることが出来るか」と問い返している（10:38）。この問答はエルサレム入城の直前になされており、イエスが飲むことになる杯と受けることになる洗礼とは、受難と死のことを指していることは先を知っている受難物語の読者には明らかである。しかし、物語の登場人物であるヤコブとヨハネにはこの時点では明確でなく、意味が良く分からないままに「出来ます」と答えているが（10:39）、後に自分たち自身の言葉に反して彼らは他の弟子たちと共にイエスの逮捕の場面で逃げ去ることになる（14:50）。

エルサレムで語られた譬え

イエスはエルサレム入城後、エルサレムの神殿の庭で教えを語ったが、その時に神殿の庭で犠牲の動物を売ったり、両替をしたりする商人を追い出した（マコ 11:15-16）。この宮清めの行動の根拠として、神殿は「祈りの家」と呼ばれる場所なのに（イザ 56:7）、彼らが騒がしい「強盗の巢窟」に変えてしまっているとイエスは主張した（マコ 11:17）。「強盗の巢窟」という句は、神殿崩壊を預言したエレミヤの言葉の中に出て来る譬えであり（エレ 7:11 を参照）、日常生活において非倫理的行動を行っていながら、神殿を頼みとするイスラエルの人々に対して厳しく警告している⁴³。

4. マルコ福音書における譬え話

4.1 ガリラヤで語られた譬え話

ガリラヤ宣教において、イエスは譬えを用いて語ることが多かった。聴衆を構成していたガリラヤの無学な民衆が良く理解できるように、農村生活の身近な題材を取り上げて譬え話の形で教えを語った（マコ 4:33-34）⁴⁴。例えば、マコ 4:1-9 ではイエスが湖上に浮かべた小舟の中に座って、湖岸に立っている群衆に対して、「種蒔く人の譬え」を語っている。譬え話は、種蒔く人が播いた穀物の種が落ちた土地によって、うまく成長しないことが多くあるが、成長して豊に実を結ぶこともあることを述べた後に（4:2-8）、「聞く耳を持つ者は聞くが良い」という警告によって結ばれている。語られていることは、種を播いてから耕す粗放な当時の農耕のやり方を前提にした叙述であり、聴衆には身近な例を挙げている⁴⁵。農耕に関する格言であれば、種が育つには良い土地が必要であるから、この譬え話は農耕に適した土地を選び、良く耕すことを勧めていることになる（農耕技術を神が与える知恵として語るイザ 29:23-26 を参照）⁴⁶。しかし、イエスは農耕に関する経験知を神の国の到来を語るメタファーとして語っているので、この譬え話は新たな意味の次元を切り開いている⁴⁷。そこに開示されている新しい意味は聴衆にとって自明ではなく、新たに発見されな

ければならない。弟子たちは喩えの意味が分からないでそれをイエスに尋ねている（マコ 4:10; 8:26）。

この譬え話の本体部分に続く章節は、初代教会がこの譬えをどのように解釈したのかということを示している⁴⁸。マコ 4:10-12 は、イザヤの預言を引用しながら（イザ 6:9-10）、譬えが外部者には理解しがたい謎ともなり得ることを指摘している（マコ 4:10-12）。この章句は譬えが秘儀（μυστήριον）であり（4:11）、その意味を解く解釈の鍵は自分たちだけに与えられており、外部者には与えられていないとする排他的な理解を示している⁴⁹。彼らが採用した寓意的な理解によれば、種蒔きが播く種とは神の言葉のことであり（4:13）、種蒔く人とは宣教者、或いは、彼らを用いて宣教を行う神である（I コリ 3:5-9 を参照）。4つの土地とは宣教の言葉を聞く人間の心の在り方を象徴している（マコ 4:14-20）⁵⁰。話の要素一つ一つに対して隠された意味を探求することは、解釈法としてのアレゴリーの特色を示している⁵¹。

アレゴリー（寓意的解釈）はヘレニズム期のギリシア人思想家たちが、ホメロスやオデュッセイア等の神話的記述の合理的解釈のために編み出した手法であり、記述の字義的意味を越えて、そこには直接には書かれていない思想を読み取ることを目指している⁵²。この釈義法はローマ帝政期のユダヤ人思想家たちによって、旧約聖書解釈に採用された。特に、アレクサンドリアのフィロンはこの手法をモーセ五書の解釈に応用し、律法の戒めについて書かれている通りの字義的意味を越えて、明示的には書かれていない寓意的意味を読み取っている⁵³。例えば、フィロンは創世記2章の楽園物語を寓意的に解釈し、エデンの園は神の知恵を表し、そこから湧き出る水が作る4つの川の流れは、それぞれ正義（義）や思慮や自制や勇氣等の徳目を象徴すると考える（『律法の寓意的解釈』1.64-65）。徳としての正義は他の3つの主要徳目と同様に、神の知恵に起源し、人間の魂がそこから汲み取るものとされている。ヘレニズム・ユダヤ教の寓意的な聖書解釈法は、初代教会の聖書解釈に影響を与えた。例えば、使徒パウロは創

世記に出て来る主人のサラとその奴隷ハガルのお話を（創 16:1-16）、律法から自由に生きるキリスト教徒と律法の拘束のもとにあるユダヤ教徒の関係を象徴する話として解釈した（ガラ 4:21-31）⁵⁴。

マコ 4:21-23 においてイエスは、「灯火」の譬えを語っている。話のポイントは、灯火は燭台の上に置いて部屋を照らすためにあるものであり、升の下や寝台の下のように見えないところに置くものではないところにある（マタ 5:15 を参照）。この灯火は神の国の到来を語る福音の象徴であり、それは不自然と明らかになり、隠すことは出来ないことを強調している⁵⁵。この短い譬え話は何を意味しているかということが明確であり、理解しやすかったと考えられる。

「成長する種の譬え」（4:26-29）と「からし種の譬え」（4:30-32）は、神の国の譬えであることが導入句によって明示されているが、これらは福音書記者によって付加された編集句である（4:26, 30）⁵⁶。「成長する種の譬え」は人間の思いを超えた神の国の進展を播かれた種の驚異の成長に譬えている⁵⁷。この譬え話は、農夫が土地に種を播き、種が芽を出し、茎を伸ばし、穂を出し、実を結ぶ過程を淡々と描写する。彼は何故そのようなかを知らないが、実が熟す時を迎えると、鎌を入れて収穫することとなる（4:26-29）。この譬えの背後には旧約聖書の文学的伝統が存在している。土地に播かれた種が芽を出し、成長することは、神の恵みのしるしとなっている（イザ 61:11）。鎌を入れる収穫の時は旧約聖書においても（ヨエ 4:13）、新約聖書においても（マタ 13:30, 39-43; 黙 14:14-20 を参照）終末の裁きの象徴となることが多い⁵⁸。しかし、豊かな収穫を神の祝福のしるしと見なす伝統や（創 26:12; レビ 25:21）、刈り入れによる収穫の喜びを語る伝統も旧約聖書には存在している（詩 126:5-6）。新約聖書においても収穫が、神の国の救いをもたらす神の国の到来に関連して語られることもある（マタ 9:37-38; 10:2; ヨハ 4:35-36）。「成長する種の譬え」が用いる刈り入れのメタファーはこちらの系譜に属する⁵⁹。

「からし種の譬え」（4:30-32）においてイエスは、

「（からし種は）土地に播かれる時は土地に播かれるあらゆる種よりも小さいが、一旦播かれると、成長して他のどんな野菜よりも大きくなり、その陰に空の鳥が宿ることが出来るようになる」と述べる（マコ 4:30-32; さらに、エゼ 31:6; ダニ 4:9 を参照）。この譬えは、からしという植物は種の時は非常に小さいのに、成長すると他のどの野菜よりも大きくなり、大きな木と同様に枝が張って鳥が宿る程になることを採り上げて（詩 104:12; エゼ 17:6-7, 22-24; 31:6; ダニ 4:9, 18; を参照）、地上における神の国の進展の不思議を示す象徴としている⁶⁰。この譬えは不思議な自然現象を取り上げて、神の国が人為的営みを超えて進展することを語るメタファーとしている⁶¹。

4.2 エルサレムで語られた譬え話

イエス一行のエルサレム入城後に神殿で起こった宮清めの出来事の後（マコ 11:15-16）、イエスはユダヤ人指導者たちと厳しい対立のもとに置かれ、神殿の庭で彼らとの論争が繰り返された。神殿で教えるイエスの権威を巡る権威論争の後に（11:27-33）、イエスは、「ぶどう園の主人と小作人の譬え」を語っている（12:1-11）。この譬え話を語った相手は、権威論争の相手であった「祭司長、律法学者、長老たち」であろう（11:27 を参照）。譬え話は葡萄園の所有者と小作人である農夫たちとの間に起こった収穫を巡る紛争を内容としている。所有者は収穫期になったので、貸し与えていた葡萄園の収穫物を受け取るために使者の僕を繰り返し派遣するけれども、小作人たちは使者を虐待し、また殺害して収穫物を渡さない。最後に所有者は愛する息子を送ったけれども、農夫たちは彼を殺して、放り出してしまった。そこで、所有者は怒って小作人の農夫たちを殺し、他の者に葡萄園を引き渡すことになることとされている。12:11-12 は解釈句であり、家造りによって捨てられた石が隅の頭石になったことを語る詩 118:22-23 の内容を思い起こすように促している（使 4:11; I ペト 2:4, 6 を参照）⁶²。

この譬え話は、農園の所有者と小作人の間に起

こる収穫物の取り分を巡る紛争を誇張して描いている⁶³。農園の所有者は神を（詩 80:8-18; イザ 5:1-2; 27:2-6; エレ 2:21 を参照）、僕たちは旧約の預言者たちを（エレ 7:25; 25:4; アモ 3:7; ゼカ 1:6 を参照）、愛する息子はイエスを表しているのに対して（マコ 1:11; 9:7 を参照）、小作人の農夫たちはイエスと論争しているユダヤ教の指導者たちのことを言っていることは文脈上明らかである（11:27 を参照）⁶⁴。指導者たちも即座にそのことに気付いてイエスを捕らえようとしたが、群衆の反応を恐れてそれを控えた（12:12）。この譬え話は権力を持つ者たちに対して自分たちが行っていることの不当性を認識させるために創り出されている。この喩え話は、バト・シェバ事件（サム下 11:1-26）で犯した過ちをダビデ王に悟らせるために預言者ナタンが語った「二人の男の譬え」に機能が類似している（サム下 12:1-15 を参照）⁶⁵。

マルコ 13 章の冒頭でイエスは弟子たちに対して神殿崩壊の預言を行う（13:1-2）。驚いた弟子たちの質問に答えてイエスは城外のオリブ山に座って終末の時の到来を巡る一連の教話を語ったという設定になっている（13:3-37）。この小黙示録と呼ばれるイエスの講話の最後に「旅する主人の帰還の譬え」が置かれている（13:34-37）。イエスは終末の時がいつ来るのかということについて、「その日、その時は誰も知らない。父だけが知っている。気を付けて目を覚ましていなさい」と勧めた後に（マコ 13:32-33; さらに、I テサ 5:1-2 も参照）、この譬え話を語っている。この譬え話は旅に出る主人が何時帰って来るのか分からないので、何時帰って来てもいいように目を覚ましているように門番に言いつける例を挙げて（マコ 13:34）、弟子たちに対して主人の帰還に備えて、「目を覚ましていなさい」と勧めている（13:35-37）。この譬えは復活・昇天したキリストの再臨の時が何時なのか誰にも分からないので、何時起こっても良いように備えていることを勧めている⁶⁶。譬え話に出て来る主人は再臨のキリストであり、門番は弟子たちに象徴される信徒たちであろう⁶⁷。この譬え話は復活・昇天したキリストが

終わりの時にやって来て世界を裁く再臨信仰が前提になっており（マタ 25:1-13, 14-30, 31-46; I コリ 15:23-28; I テサ 4:13-18）、初代教会が生み出した伝承であろう。マルコ福音書の読者はこの譬えを教育的な目的で語られたものであると理解し、「目を覚ましていなさい」という言葉は、弟子たちを超えて自分たちに直接に語り掛ける勧めであると受け取ったことを示している。

5. まとめと展望

マルコ福音書の釈義的研究から、福音書中に見られるイエスの譬えについて、次のことが確認できる。

- (1) 譬えは短い格言的な成句として用いられる場合と（マコ 1:17; 2:17, 19; 7:27; 8:15, 34; 9:50 他）、ストーリー性を持った譬え話として語られる場合がある（マコ 4:1-9, 21-23, 26-29, 30-32; 12:1-9 他）。マルコ福音書の物語の中で、どちらの文学形式も聞いた者の脳裏に特別な意味を喚起するメタファーとして機能している。メタファーは修辞法の一つであるが、新たな意味を創り出し、聞く者を新たな現実認識に導く効果を持っている。
- (2) ガリラヤ宣教において、イエスは譬えを用いて語ることが多かった。聴衆を構成していたガリラヤの無学な民衆が良く理解できるように、農村生活の身近な題材を取り上げて譬え話の形で教話を語った（マコ 4:33-34）。イエスは農耕の中で起こる人間の知恵を超えた現象を人間の思いを超えて到来する神の国のメタファーとしている（特に、4:26-29; 4:30-32 を参照）。

イエスはガリラヤで神の国の到来と悔い改めの勧めを説いた（1:14-15）。神は見えない方であり、この見えない神が、言葉を通して見える世界を創ったということは聖書の信仰の大前提である（創 1:1-2:4; 詩 8:4-9; 19:2-7; 33:9; 121:2; 136:4-9; 146:6; 148:5 を参照）。人間の手で作った神々の像を拜むことは偶像礼拝

として固く禁じられている（出 20:4-6; 申 5:8-10）⁶⁸。イエスもユダヤ人であり、旧約聖書の信仰を継承している。イエスが用いる農作業の喩えに出て来る人間や植物や土地が神性を帯びているのではない。それらはすべて被造物に過ぎない。しかし、譬え話は類比（Analogie）の作用によって神の国の到来の出来事の特徴を指し示すことは出来る⁶⁹。譬え話に用いられる植えられた穀物や野菜の成長は人間の知恵を超えた自然現象であり、人間は驚きながらもその現象の結果得られる収穫を享受している。同様に、神の国の到来も人間の知恵を超えた出来事であり、人間に出来ることはそれを信じて、神の支配に与ることだけである。イエスの譬え話は、目に見える農作業の叙述を通して目に見えない神の国の到来の豊かさを指し示している⁷⁰。

- (3) 福音書中の譬え話の多くは史的イエス自身に遡るものであるが、一部には初代教会由来の譬え話も存在している（例えば、マタ 13:24-30; 13:47-50; 25:1-13; 25:31-46; マコ 12:1-12; 13:34-36; ルカ 14:5-24 他）。これらの譬え話は、イエスの死と復活・昇天を前提にして、キリストの来臨の時を迎える信徒の心構えについて語る勧告的な機能を持っている⁷¹。初代教会の信徒たちは、キリストの再臨を待ち望む時に生きる自分たちの生きる基本的姿勢として「その時がいつ来るかは分からないので、何時来ても良いように「目を覚ましている」ことが必要だと考え、繰り返しそう教えていたのである。

Tübingen: Mohr-Siebeck, 1972); Eta Linnemann, *Gleichnisse Jesu* (6. durchgesehne und ergänzte Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1975); Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, FRLANT 120 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978); Bernard Brandon Scott, *Hear then the Parable: A Commentary on the Parables of Jesus* (Minneapolis: Fortress, 1989); Charles W. Hedrick, *Parables as Poetic Fictions: The Creative Voice of Jesus* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994); Wolfgang Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu* (3. unveränderte Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1995); Aaland J. Hultgren, *The Parables of Jesus: A Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000); Klyne Snodgrass, *Stories with Intent: A Comprehensive Guide to the Parables of Jesus* (Grand Rapids: Eerdmans, 2008); Ruben Zimmermann ed., *Die Hermeneutik der Gleichnisse Jesu*, WUNT 231 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2008); Luise Schottroff, *Die Gleichnisse Jesu* (Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015) を参照。

- 2 例外が、両者を一括して扱う Paul Ricoeur, “Biblische Hermeneutik,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 311-312; Ruben Zimmermann ed., *Kompendium der Gleichnisse Jesu* (2. korrigierte und um Literatur ergänzte Auflage; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015) の立場である。
- 3 OED 11:177; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:70, 73; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 16; Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 22; Robert Funk, “Das Gleichnis als Metapher,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 20; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 67; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 3; Kurt Eilemann, *Gleichnisse. Theorie - Auslegung - Didaktik* (Tübingen: Narr Francke Attempto, 2020), 17.
- 4 Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 63-64.
- 5 Funk, “Das Gleichnis als Metapher,” 29-31, 33; Ricoeur, “Biblische Hermeneutik,” 283, 288, 294-295, 314; Eberhard Jüngel, “Das Evangelium als analoge Rede von Gott,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft*

注

- 1 例えば, Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu* (zwei Teile; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1910); C. H. Dodd, *The Parables of the Kingdom* (New York: Charles Scribner's Sons, 1936); Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu* (3. durchgesehne Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1954); Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus* (4. Aufl.;

- (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 355-356; Gerhard Sellin, "Allegorie und 'Gleichnis'," in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 374-374, 408-409; John R. Donahue, *The Gospel in Parable: Metaphor, Narrative, and Theology in the Synoptic Parables* (Minneapolis: Fortress, 1988), 9-11,13; Scott, *Hear then the Parable*, 47-48; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 151-153; Snodgrass, *Stories with Intent*, 8; 宮本久雄「イエスの譬え話」宮本久雄・山本巍・大貫隆『聖書の言語を越えて』東京大学出版会、1997年、119頁を参照。
- 6 Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," 316; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 159-160; Erlemann, *Gleichnisse*, 18.
- 7 Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," 283-284.
- 8 Heinrich Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik* (4. Aufl.; Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008), § 843.
- 9 Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, § 422-425; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:70,73, 96-97; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 130-131, 138-139, 307-308を参照。尚、Wolfgang Harnisch, "Die Sprachkraft der Analogie," in Wolfgang Harnisch ed., *Die Gleichnisse Jesu* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 390-413(特に、396, 398, 408-409)は譬えの機能は類比に基づいた例示であって論証ではないとするが、譬えは置かれた文脈より論証的性格を帯びることがある。
- 10 Funk, "Das Gleichnis als Metapher," 22, 29, 33; Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 4; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 8; Erlemann, *Gleichnisse*, 33.
- 11 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:70, 105, 317; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 18-19, 24-26; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 15.
- 12 Dan O. Via, *The Parables: their Literary and Existential Dimension* (Philadelphia: Fortress, 1967), 13-17; Funk, "Das Gleichnis als Metapher," 39, 43-45; John Dominic Crossan, *Cliffs of Fall* (New York: Seabury, 1980), 8-9, 50-52; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 59-60; Donahue, *The Gospel in Parable*, 12; Scott, *Hear then the Parable*, 45; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 140; Snodgrass, *Stories with Intent*, 9, 29.
- 13 *LSJ*, 1305; *BDAG*, 1543; Scott, *Hear then the Parable*, 19.
- 14 *LSJ*, 1118; *BDAG*, 1330; Erlemann, *Gleichnisse*, 33.
- 15 Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, § 286; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 59-60; Sellin, "Allegorie und 'Gleichnis'," 375.
- 16 Scott, *Hear then the Parable*, 7-8; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 107-108; 荒井『イエス・キリスト(下)』118-142頁; Donahue, *The Gospel in Parable*, 20-25を参照。
- 17 Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," 282-283; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 125-141 川島重成『イエスの七つの譬え—開かれた地平—』三陸書房、2000年、81-82頁; 廣石望『信仰と経験 イエスとく神の王国』の福音』新教出版社、2011年、312-313頁を参照。
- 18 Bauer-Aland, 1238-1239; F. Hauck, "parabolh.," *TWNT* 5:741-749; G. Haufe, "parabolh.," *EWNT* 3:35-38; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:25-33; Scott, *Hear then the Parable*, 21-30.
- 19 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:34; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 5.
- 20 *DCH* 5:537-539; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 5-6; Donahue, *The Gospel in Parable*, 5; Scott, *Hear then the Parable*, 8-13.
- 21 Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition* (10. Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1995), 195.
- 22 *LSJ*, 1224-1225; Bauer-Aland, 1148-1149.
- 23 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 15-16.
- 24 Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, 222; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:11, 16-24, 150; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 91-162.
- 25 Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," 313-316; Sellin, "Allegorie und 'Gleichnis'," 416-417; Snodgrass, *Stories with Intent*, 8-9.
- 26 Joachim Gnllka, *Das Evangelium nach Markus*, *EKK* 2/1-2 (2 Teile: 3. durchgesehne Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 1989), 1:44-45; Joel Marcus, *Mark: A Commentary*, *AB* 27-27A (2 vols; New York: Doubleday; New Haven: Yale University Press, 2000-2009), 1:148; Adela Yarbro Collins, *Mark* (Minneapolis: Fortress, 2007), 136-137.
- 27 Eduard Schweizer, *Das Evangelium nach Markus*, *NTD* 1 (17. durchgesehne Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989), 21; Dieter Lüthmann, *Das Markusevangelium*, *HNT* 7 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1987), 47; R. T. France,

- The Gospel of Mark: A Commentary on the Greek Text*, NIGTC (Grand Rapids: Eerdmans, 2002), 96-97; John R. Donahue, *The Gospel of Mark*, Sacred Pagina 2 (Collegeville, MN: Liturgical, 2002), 75; Peter Dschulnigg, *Das Markusevangelium*, TKNT 2 (Stuttgart: Kohlhammer, 2007), 76; Mark L. Strauss, *Mark: A Commentary*, ZECNT 2 (Grand Rapids: Zondervan, 2014), 83; Darrell Bock, *Mark*, NCBC (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), 122 を参照。
- 28 Rudolf Pesch, *Das Markusevangelium*, HTKNT 7 (2 Bände; Freiburg: Herder, 1976-1977), 1:166-167.
- 29 Marcus, *Mark*, 1:228; Collins, *Mark*, 195; France, *The Gospel of Mark*, 135; Strauss, *Mark*, 133; 上村 静『宗教の倒錯 ユダヤ教・イエス・キリスト教』岩波書店、2008年、177-178頁を参照。
- 30 Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 116-117.
- 31 Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:173; Marcus, *Mark*, 1:237-238; Collins, *Mark*, 199; Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 116; Gabi Kern, “Fasten oder feiern? – Eine Frage der Zeit (Vom Bräutigam / Die Fastenfrage): Mk 2,18-20 (Mt 9,14f. / Lk 5,33-35 / EvThom 104),” in Ruben Zimmermann ed., *Kompendium der Gleichnisse Jesu* (2. korrigierte und um Literatur ergänzte Auflage; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015), 265, 269-270.
- 32 Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:173; Collins, *Mark*, 199.
- 33 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 184-185; Donahue, *The Gospel of Mark*, 107.
- 34 Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:174-175; Kern, “Fasten oder feiern?,” 267.
- 35 Robert Gundry, *Mark: A Commentary on his Apology for the Cross* (Grand Rapids: Eerdmans, 1993), 134; Donahue, *The Gospel of Mark*, 109.
- 36 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 189, 196; Lührmann, *Das Markusevangelium*, 63-64; Collins, *Mark*, 200; Bock, *Mark*, 152; Martin Leutzsch, “Was past and was nicht (Vom alten Mantel und vom neuen Wein): Mk 2,12f (Mt 9,16f. / Lk 5,336-39 / EvThom 47,3-5),” in Zimmermann ed., *Kompendium*, 275-276.
- 37 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 257-258; Collins, *Mark*, 366.
- 38 Bauer-Aland, 687; Schweizer, *Das Evangelium nach Markus*, 86; Gnilka, *Das Evangelium nach Markus*, 1:310; Bock, *Mark*, 236.
- 39 Gnilka, *Das Evangelium nach Markus*, 2:23; Collins, *Mark*, 408.
- 40 Pesch, *Das Markusevangelium*, 2:60; Bock, *Mark*, 245.
- 41 J. F. Ross, “Salt,” *IDB* 4:167-168; Carol G. Browning, “Salt,” *NIDB* 5:44-45.
- 42 Marcus, *Mark*, 2:693,698-699; Collins, *Mark*, 455; France, *The Gospel of Mark*, 384-385.
- 43 Marcus, *Mark*, 2:784; Collins, *Mark*, 531.
- 44 Hultgren, *The Parables of Jesus*, 9.
- 45 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 5; Dronsch, “Vom Fruchtbringen (Sämann mit Deutung),” 302.
- 46 Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 174 を参照。
- 47 Lührmann, *Das Markusevangelium*, 85; Dronsch, “Vom Fruchtbringen (Sämann mit Deutung),” 305-308; Donahue, *The Gospel in Parable*, 34; 廣石 望『「神の国」とイエスの譬え－関係規定のための解釈学的考察－』『聖書学論集』41号、2009年、254頁を参照。
- 48 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 181; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 7, 60-62; Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 116-118; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 111-115; Scott, *Hear then the Parable*, 344; Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:241; Hans-Josef Klauck, *Allegorie und Allegorese in synoptischen Gleichnistexten* (Münster: Aschendorff, 1978), 200; Sellin, “Allegorie und „Gleichnis“,” 396; Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 164-165; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 189-190; 川島『イエスの七つの譬え』、23-28頁; 廣石『信仰と経験』、310-311頁; Kristina Dronsch, “Vom Fruchtbringen (Sämann mit Deutung): Mk 4,3-9 (10-12).13-20 (Mt 13,3-9.18-23 / Lk 8,5-8.11-15 / EvThom 9 / Arg 220),” in Zimmermann ed., *Kompendium*, 297, 301-304; Erlemann, *Gleichnisse*, 95; Collins, *Mark*, 243.
- 49 Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, 202; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 13-16; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 2:532-538; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 11-12; Sellin, “Allegorie und ‘Gleichnis’,” 396-397; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 102-103; Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 164-165; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 189-190, 453-467; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 61; Schottroff, *Die Gleichnisse Jesu*, 92-97; Lührmann, *Das Markusevangelium*, 80-81; Schweizer, *Das Evangelium nach Markus*, 46-48; Gnilka, *Das Evangelium nach Markus*, 1:46-48; Robert Guelich, *Mark: A Commentary*, WBC 34A-B (2 vols; Dallas:

- Word, 1989), 1:217-219; Dschulnigg, *Das Markusevangelium*, 134-139; Collins, *Mark*, 247-252; Erlemann, *Gleichnisse*, 18-19; 荒井献『イエス・キリスト(下)』講談社学術文庫1468、2001年、159-163頁を参照。
- 50 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:60.
- 51 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:59, 70; Klauck, *Allegorie*, 201; Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:241-243; Marcus, *Mark*, 1:309-310; Donahue, *The Gospel of Mark*, 141, 143; Erlemann, *Gleichnisse*, 22.
- 52 Klauck, *Allegorie*, 45-61; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 55-56.
- 53 フィロンの聖書釈義法の特徴については、Klauck, *Allegorie*, 96-104; J. Cazeaux, "Philon d'Alexandrie, exégète," ANRW II 21.1 (1984), 156-226; B. Mack, "Philo and Exegetical Traditions in Alexandria," ANRW II 21.1 (1984), 227-271; D. Dawson, *Allegorical Readers and Cultural Revision in Ancient Alexandria* (Berkeley - Los Angeles: University of California Press, 1992), 73-126; P. Borgen, *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time*, SNT 86 (Atlanta: Society of Biblical Literature, 1997), 46-79; idem., "Philo - An Interpreter of the Laws of Moses," in *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria* (ed. T. Seland; Grand Rapids: Eerdmans, 2014), 75-101; A. Kamesar, "Biblical Interpretation in Philo," in *The Cambridge Companion to Philo* (ed. A. Kamesar; Cambridge: Cambridge University Press, 2009), 65-94 を参照。
- 54 詳しくは、Klauck, *Allegorie*, 116-119; 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年、192-201頁を参照。
- 55 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 86; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 144; Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:249; Gnlika, *Das Evangelium nach Markus*, 1:180; Collins, *Mark*, 253; Bock, *Mark*, 180.
- 56 Jünger, *Paulus und Jesus*, 149, 152.
- 57 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 176-177; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 93-94; Schweizer, *Das Evangelium nach Markus*, 51; Jünger, *Paulus und Jesus*, 151; Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:255; Lührmann, *Das Markusevangelium*, 90; Collins, *Mark*, 254; Strauss, *Mark*, 197; Dschulnigg, *Das Markusevangelium*, 143; Detlev Dormeyer, "Mut zur Selbst-Entlastung (Von der selbstständig wachsenden Saat): Mk 4,26-29 (EvThom 21,9)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 320-321; Snodgrass, *Stories with Intent*, 186.
- 58 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 119; Scott, *Hear then the Parable*, 369-370; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 388; Dormeyer, "Mut zur Selbst-Entlastung," 319-320, 322-323.
- 59 Andreas Dettwiler, "Das Gleichnis von der selbstwachsenden Saat," in Jörg Frey / Esther Marie Jonas eds., *Gleichnisse verstehen. Ein Gespräch mit Hans Weder*, BTS 175 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2018), 80, 86-87; 上村『宗教の倒錯』、197-198頁を参照。
- 60 Donahue, *The Gospel in Parable*, 37; idem., *The Gospel of Mark*, 152; Gnlika, *Das Evangelium nach Markus*, 1:187; Gundry, *Mark*, 230; Bock, *Mark*, 182; Georg Gäbel, "Mehr Hoffnung wagen (Vom Senfkorn): Mk 4,30-32 (Q 13,18f / Mt 13,31f / Lk 13,18f. /EvThom 20)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 330, 332-333; Snodgrass, *Stories with Intent*, 222; Strauss, *Mark*, 199.
- 61 Jünger, *Paulus und Jesus*, 153; Pesch, *Das Markusevangelium*, 1:260; Scott, *Hear then the Parable*, 387; Gäbel, "Mehr Hoffnung wagen (Vom Senfkorn)," 333-334; 上村『宗教の倒錯』岩波書店、197-200頁を参照。
- 62 Gnlika, *Das Evangelium nach Markus*, 2:148; Snodgrass, *Stories with Intent*, 276; Marcus, *Mark*, 2:814.
- 63 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 98-102; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 72-73; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 154-155; Donahue, *The Gospel of Mark*, 337-339; William R. Herzog, *Parables as Subversive Speech* (Louisville: Westminster John Knox, 1994), 101-113; John S. Kloppenborg, *Tenants in the Vineyard: Ideology, Economics, and Agrarian Conflict in Jewish Palestine*, WUNT 195 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2006), 284-349; Ernest van Eck, *The Parables of Jesus the Galilean: Stories of a Social Prophet* (Eugene, OR: Cascade Books, 2016), 193-207; Schottruff, *Die Gleichnisse Jesu*, 27-30.
- 64 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 129-130; Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 54-56, 59; Via, *The Parables*, 133-134; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 156-157; Lührmann, *Das Markusevangelium*, 198-199; Pesch, *Das Markusevangelium*, 2:214-222; Gnlika, *Das Evangelium nach Markus*, 2:145-146; Donahue, *The Gospel in Parable*, 55-56; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 358-360; Gundry, *Mark*, 659-664; France, *The*

- Gospel of Mark*, 462; Marcus, *Mark*, 2:811-813; Collins, *Mark*, 545-547; Dschulnigg, *Das Markusevangelium*, 311-313; Strauss, *Mark*, 514-516; Bock, *Mark*, 301-302; Tania Oldenhege, "Spiralen der Gewalt (Die bösen Winzer): Mk 12, 1-12 (Q 13,18f / Mt 12,1-12 / Lk 20,9-19 / EvThom 65)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 355-356; Snodgrass, *Stories with Intent*, 282.
- 65 ナタンが語った喩え話が果たした機能については、Claus Westermann, *Vergleiche und Gleichnisse im Alten und Neuen Testament* (Stuttgart: Calwer, 1984), 25を参照。
- 66 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 165, 171; Donahue, *The Gospel in Parable*, 58-60; Collins, *Mark*, 618.
- 67 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 163; Pesch, *Das Markusevangelium*, 2:316-317; Gnilka, *Das Evangelium nach Markus*, 2:209-210; Detlev Dormeyer, "Seid wachsam (Vom spät heimkehrenden Hausherrn): Mk 13,30-33.34-37 (Lk 12,35-38)," in Zimmermann ed., *Kompendium*, 375-376, 378-381.
- 68 Crossan, *Cliffs of Fall*, 20-21, 58-59.
- 69 Jüngel, *Paulus und Jesus*, 135; idem., "Das Evangelium als analoge Rede von Gott," 359; Sellin, "Allegorie und 'Gleichnis'," 411; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 155; Erlemann, *Gleichnisse*, 95-96.
- 70 Donahue, *The Gospel in Parable*, 38-39; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 10; Jüngel, "Das Evangelium als analoge Rede von Gott," 346-347; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 277-278; Donahue, *The Gospel in Parable*, 15-16.
- 71 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 276; Donahue, *The Gospel in Parable*, 61-62.

Metaphor of the Kingdom of God: The Literary and Theological Functions of the Parables in the Gospel of Mark.

Takaaki Haraguchi

Jesus often told the parables of the Kingdom of God when he spoke to a large crowd of people in Galilee (Mark 4:1-9, 26-29 etc.). A parable is a short metaphorical story which compares one thing to another. Jesus employed the figure of speech for the sake of better understanding on the side of his audience (cf. 4:33-34). The parables of Jesus prompt his audience to reach a new understanding of the reality of the rule of God. Though most parables in the Gospels are derived from the historical Jesus, some of them were composed in the early church. They exhort the believers to be ready for the parousia of the risen Lord (Matthew 25:1-13, 31-46; Mark 12:1-12; 13:34-36; Luke 14:5-24).

Keywords: parable, metaphor, understanding, Jesus, the early church